

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	(1) 「百折不撓・自彊不息」の校訓のもと、不屈でたくましい精神力をもった人材を育成する。 (2) 文武両道をモットーとして、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成する。 (3) 勤労を尊び、思いやりと奉仕の心をもって社会に貢献する人材を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
	(1) グローバルリーダーとなるための資質を備え、将来世界で活躍したり、地域の活性化に貢献したりすることができる生徒 (2) 「生命」を大切にできる心を持ち、他人の価値観の多様性を認め、互いを尊重できる人権意識をもった生徒 (3) 自己の能力や適性、興味を理解して自ら主体的に将来の進路を選択・決定する態度をもつことができる生徒	(1) 知的好奇心を喚起し、主体的な学習態度や人間性を育成するための、質の高い授業の実施 (2) 将来の社会貢献につながるような、幅広い分野での専門的な内容の体験プログラムの提供 (3) 探究的な学びや個に応じた学びを重視した適時・適切な支援	(1) 不屈でたくましい精神力をもち、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を、仲間とともに目指したいと考える生徒 (2) 勤労を尊び、良心や思いやり、奉仕の心をもって社会に貢献できることを、仲間とともに目指したいと考える生徒

3 評価する領域・分野	◇教務部	
4 現状の分析	○ICTを活用した学習活動 ▲学習評価および個に応じた適切な指導	
5 学校の抱える課題	◇観点別学習状況評価を受け、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるよう、支援を図っていく必要がある	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・MetaMoJiやICTを活用した授業のさらなる研究。 ・観点別学習状況評価の組織的かつ計画的な実施 ・観点別学習状況評価を受けた教員の指導の改善。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 授業研究 (2) 観点別学習状況評価の研究 (3) 授業改善	(1) MetaMoJiなどICT機器を効果的に用いた教材開発や指導法の改善。ICT活用の成果および効果についての検証。ICTを活用した授業の件数、実施した教員数を指標とする。 (2) 3観点の評価規準や評価方法について、教科内で明確にし、評価に関する実践事例を蓄積し、共有。学校として組織的かつ計画的に取り組む。 (3) 観点別評価の実施に伴い、教師が指導の改善を図る。授業アンケートの結果と教員同士の相互評価の活用。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
(1) 各先生方がICT機器を用いた授業研究を行っている。各教科でICTを活用した研究授業や公開授業を行った。 (2) 各教科で評価規準や評価方法を作成し、観点別学習状況評価を実施した。 (3) 授業アンケートの結果や教員同士の相互評価を受け、授業改善を実施した。	(1) 学校アンケートの回答結果（ICT活用：保護者95.4%、生徒92.8%）。職員研修の実施。 (2) 昨年度の評価を参考に評価の改善を図った。学校アンケートの回答結果（評価方法：生徒86.5%） (3) 授業アンケートの回答結果（主体的に参加できる授業：97.5%、教材・用具が工夫：96.3%）。	(1) A B C D (2) A B C D (3) A B C D
12 成果	○ICTに関する授業研究は概ね良好である。また、学校アンケートの結果は、概ね学校に好意的な評価を得ている。 ○各授業において、生徒が主体的に参加できる授業形態を取ることができている。 ・ ▲様々な場面で生徒の学習評価を行っているが、それを生徒が実感できていない。 ▲評価を受け、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができる、生徒一人ひとりの能力に応じた適切な支援および指導。	
13 来年度に向けての改善方策案	・ 生徒自身に学習の見通しを持たせるため、学習評価の方針を事前に生徒と共有する場面を設ける。 ・ 評価する場面を精選し、指導の改善に重点を置くようにする。 ・ 教師同士での評価規準や方法の検討、実践事例の蓄積や共有を組織的に取り組む。	

総合評価
A B C D

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年1月30日

【意見・要望・評価等】

・外部の力（IT、塾）をどのようにとらえているか。学校の教育だけでなく、塾等の力も必要か。あるいは今の学校教育そのままでよいのか。

⇒個人のタイプにもよるので、各個人・家庭の考え方に任せている。学校の自習室や図書館、廊下のテーブル・椅子を使って勉強する生徒がいる一方で、部活動の後、駅前の塾に行く生徒もいる。授業内容をどの水準に合わせるのかという問題もあり、学校内で全て完結はできないので、外部の力を活用することを妨げることはできない。学校でできることは精一杯やりたい。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	(1) 「百折不撓・自彊不息」の校訓のもと、不屈でたくましい精神力をもった人材を育成する。 (2) 文武両道をモットーとして、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成する。 (3) 勤労を尊び、思いやりと奉仕の心をもって社会に貢献する人材を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
	(1) グローバルリーダーとなるための資質を備え、将来世界で活躍したり、地域の活性化に貢献したりすることができる生徒 (2) 「生命」を大切にできる心を持ち、他人の価値観の多様性を認め、互いを尊重できる人権意識をもった生徒 (3) 自己の能力や適性、興味を理解して自ら主体的に将来の進路を選択・決定する態度をもつことができる生徒	(1) 知的好奇心を喚起し、主体的な学習態度や人間性を育成するための、質の高い授業の実施 (2) 将来の社会貢献につながるような、幅広い分野での専門的な内容の体験プログラムの提供 (3) 探究的な学びや個に応じた学びを重視した適時・適切な支援	(1) 不屈でたくましい精神力をもち、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を、仲間とともに目指したいと考える生徒 (2) 勤労を尊び、良心や思いやり、奉仕の心をもって社会に貢献できることを、仲間とともに目指したいと考える生徒

3 評価する領域・分野	◇進路指導	
4 現状の分析	○生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果を見ると、「進路説明会（PTフォーラム）等、保護者が必要とする進路情報を提供する場を設けている。」について、よくあてはまる、ややあてはまるが保護者95.4%、生徒94.9%であった。「生徒に適した進路情報を示し、生徒の可能性を引き出そうとしている」について、よくあてはまる、ややあてはまるが保護者93.1%、生徒93.7%であった。保護者、生徒ともに高い評価をされている。	
5 学校の抱える課題	・進路目標に対し、教科学力が十分に備わっていない生徒が少数見られる。 ・大学入試改革へ向けての対応を行っているが、その成果を十分に活用できていない。	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 教科学力の充実と進路希望達成のための支援 2 大学入試改革へ向けての対応 3 グローバルリーダー養成事業の活用	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 教科学力の充実と進路希望達成のための支援 1 学力分析をし、一定水準以上の学力を保証 (2) 大学入試改革へ向けての対応 1 自己分析の強化 2 探究活動の充実 (3) グローバルリーダー養成事業の活用 1 参加率の向上 2 ポートフォリオの作成からキャリア指導	(1) 1年生・2年生の第2回進研模試で、偏差値50以下の生徒数を0にする。 (2) 各模試の振り返りシート、探究レポート (3) 1年間の参加者名簿一覧、「活動の記録」用紙と学校評価アンケート	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
(1) 教科学力の充実と進路希望達成のための支援 ・1・2年次生対象に、英語・数学・国語の3教科に関する学習相談会を実施し、基礎学力を定着させるために基礎学力講座を実施。 ・進研模試などの外部指標を利用し、各年次で分析し、担任、教科担任にフィードバックする。生徒が苦手科目の学習に取り組み、学習バランスを意識するよう働きかける。 (2) 大学入試改革へ向けての対応 ・模試の自己採点で、学力を客観的に分析し、メタ認知能力を向上させる。 ・FPTでの探究活動を充実させ、自ら問を立て解決する過	①生徒が基礎学力講座、学習相談会に主体的に参加する雰囲気であったか。外部指標の分析を生徒にフィードバックしたり、授業改善につなげたりすることができたか。 ②生徒が模試の振り返りシートで、自己の学力を振りかえることができたか。また、探究活動の成果をレポートにまとめることができたか。	A (B) C D A (B) C D

<p>程を通して、課題解決能力を身につける。</p> <p>(3) グローバルリーダー養成事業の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバルリーダー養成事業へ、少なくとも1人1講座は受講するように促す。生徒が参加しやすい環境づくりと、広報に努める。 ・作成したポートフォリオを担当が、二者懇談、三者懇談で活用し、生徒のキャリア意識を高める。 	<p>③生徒はグローバルリーダー養成事業の講座を受講できているか。また、ポートフォリオを活用できているか。</p>	<p>A (B) C D</p>
<p>12 成 果 課 題</p>	<p>○基礎学力講座、学習相談会を1回ずつ実施できた。生徒の学習不安に丁寧に対応することができた。</p> <p>○グローバルリーダー養成事業がほぼ予定通り実施することができた。生徒にとって非常に有効でキャリア意識を高める貴重な機会となった。</p> <p>○探究活動等の成果を生徒が外部で発表する機会が増加した。</p> <p>▲第2回進研模試の成績で偏差値50以下の生徒は1年次生が4名、2年次生が2名いた。</p>	<p>総 合 評 価</p> <p>A (B) C D</p>
<p>13 来年度に向けての改善方策案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進研模試の成績で、偏差値50以下になった生徒に対して、各教科の成績分析をもとに、年次、進路指導部・教務部とさらに連携して、該当生徒の学力向上のためのバックアップ体制を確立する。また、学習に不安を感じている生徒に対しては、今年以上に学習相談会、基礎学力講座への参加を呼びかけて、生徒に寄り添った学習支援を図る。 ・探究活動をさらに充実させ、生徒のキャリア支援を行う。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年1月30日

<p>【意見・要望・評価等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12月までに進路が決定する生徒は何人くらいか。⇒10人程度。 ・探究活動の評価はどのようにしているか。 ⇒探究活動では最後にレポートを提出し、ポスター発表も行っている。それらについて自己評価と教員による評価を行う。評価は4段階。評価項目を記したチェックシートがあり、それに基づいて評価を行い、公平性を保っている。 ・探究活動の代表発表者はどのように決定しているか。 ⇒グループ発表、クラス発表、学年発表の順に生徒どうしの評価で選ばれてくる。 ・「進路目標に対して、教科学力が十分に備わっていない生徒」について、どのような対策をしているか。 ⇒基礎学力講座や学習相談会を行っている。学習相談会は学習方法について相談するものであり、基礎学力講座は苦手科目がある生徒に対する授業である。どちらも希望制。 ・私立文系であっても、数学を使って受験する人が増えている。今後、文理融合型の学部は増えていくのか。 ⇒文理融合型の学部は増えている。今までのような文理をきっちり分ける考え方は、時代にそぐわなくなっている。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立岐阜高等学校 学校番号 1

I 自己評価

1 学校教育目標	(1) 「百折不撓・自彊不息」の校訓のもと、不屈でたくましい精神力をもった人材を育成する。 (2) 文武両道をモットーとして、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成する。 (3) 勤労を尊び、思いやりと奉仕の心をもって社会に貢献する人材を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) (1) グローバルリーダーとなるための資質を備え、将来世界で活躍したり、地域の活性化に貢献したりすることができる生徒 (2) 「生命」を大切にすることをもち、他人の価値観の多様性を認め、互いを尊重できる人権意識をもった生徒 (3) 自己の能力や適性、興味を理解して自ら主体的に将来の進路を選択・決定する態度をもつことができる生徒	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) (1) 知的好奇心を喚起し、主体的な学習態度や人間性を育成するための、質の高い授業の実施 (2) 将来の社会貢献につながるような、幅広い分野での専門的な内容の体験プログラムの提供 (3) 探究的な学びや個に応じた学びを重視した適時・適切な支援	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) (1) 不屈でたくましい精神力をもち、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を、仲間とともに目指したいと考える生徒 (2) 勤労を尊び、良心や思いやり、奉仕の心をもって社会に貢献できることを、仲間とともに目指したいと考える生徒

3 評価する領域・分野	◇生徒指導・教育相談	
4 現状の分析	「高校生としてのマナーや社会規範を身につけさせるための指導を行っている」アンケートではややあてはまる以上の評価が保護者96.0%、生徒96.1%であった。「いじめや差別を許さず、厳しく対応している」については保護者98.2%、生徒98.1%と極めて高い評価を得た。	
5 学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・多様化している生徒に対する教職員の多様かつ柔軟な対応 ・学校不適応（不登校）の生徒、保護者に対する教職員の対応 ・全教職員による生徒の規範意識、モラル意識の啓発 	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ol style="list-style-type: none"> ① 命を大切にする心や態度の醸成 ② 人権意識の涵養と情報モラル意識の高揚 ③ 個に応じた適時・適切な支援 	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 生活委員会を中心としたMSリーダーズ活動の活性化。 (2) 情報モラルに関する人権LHRの実施。 (3) 臨床心理士によるサポート制度、通級制度の活用。医療機関など外部機関との連携。	(1) 交通事故件数・ヘルメット着用者数・命の尊さ講話アンケート (2) 校内迷惑調査・ネットパトロール報告件数 (3) 教育相談・カウンセリング活用状況 心のアンケート	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
<ul style="list-style-type: none"> ・MSリーダーズによる朝の挨拶、ヘルメット啓発活動の拡充。（生徒会・有志生徒。） ・情報モラル講話・人権LHR・スマホフリーデーの実施。 ・活発なカウンセリング、外部連携。 	<ol style="list-style-type: none"> ①事故に気をつけ、命を大切にする意識を醸成できたか ②情報モラル意識を高め、違反を防ぐことができたか ③個に応じた適時・適切な教育相談活動を実施できたか 	<p>A <input checked="" type="checkbox"/> B C D</p> <p>A <input checked="" type="checkbox"/> B C D</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> A B C D</p>
12 成果	13 来年度に向けての改善方策案	
<ul style="list-style-type: none"> ○交通事故の減少（1月現在21件） ○ヘルメット着用者数の増加（昨年12月17%⇒4月22%⇒11月27%） ○カウンセリング23名、スペシャリストサポート事業カウンセリング9名 ・○心のアンケート後の懇談（4～12月約120件） ▲情報モラル違反による大きなトラブルの発生。 ▲自転車走行マナーや送迎マナー、その他様々なモラルの欠如によると思われる迷惑行為。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通事故（特に1年）や情報モラル違反の未然防止のための生徒主体の活動の拡充。 ・情報モラル講話・スマホフリーデー等に関する効果的な実施の検討。 ・心理テスト「i-check」（2年）活用の研究。 	
	総合評価 A <input checked="" type="checkbox"/> B C D	

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年1月30日

【意見・要望・評価等】

- ・学校不適應の生徒に対して合理的配慮をする場合、そのプロセスはどのようなものか。
⇒欠席日数が増えてきた生徒については、保護者との懇談を担当・年次主任と、あるいは生徒指導部と行い、生徒が来られるような雰囲気作りの方法を考える。教室にいられない生徒については、医療連携も行う。これらの配慮については教員間で共有している。
- ・「i-check」とはどのようなものか。
⇒心理テストであり、その生徒の特性・傾向がわかる。その結果をしっかりと分析した上で、個別対応をしていく。